

伝中央市（旧東八代郡豊富村）出土の初期須恵器について

石神孝子

1 はじめに

2 甲府盆地の須恵器研究略史

3 伝中央市（旧東八代郡豊富村）出土須恵器直口壺について

4 おわりに

1 はじめに

山梨県立考古博物館では、2006年4月29日から6月25日までの約2ヶ月間にわたって春季企画展『山梨の初期須恵器～古墳時代後半期の土器とその周辺～』を開催した。ここでは大陸から須恵器が伝播し、大阪府堺市の陶邑窯跡群を中心とした各地で生産が開始され、やがて甲府盆地にも須恵器がもたらされたことを、要点を押さえてわかりやすく紹介したもので、初めて県内出土の主な初期・古式須恵器が一同に集められた展示会であった。

ここで紹介する初期須恵器は、この『山梨の初期須恵器』を観覧した、甲府市（旧東八代郡中道町）上曾根町在住の滝本浩久氏の申し出により、その存在が明らかになったものである。この須恵器は滝本氏が30年以上前に甲府市の骨董を扱う店より購入したもので、「中央市（旧東八代郡豊富村）より出土したもの」であるとのことだが、詳細については不明である。しかしこの須恵器が、比較的古相を呈すること、甲府盆地の須恵器出現段階を考える上で貴重な一例になり得ることなどを考慮した上で、この須恵器について考えてみたい。

2 甲府盆地の須恵器研究略史

甲府盆地出土の初期・古式須恵器研究については、およそ3期の画期がみられる。まずは橋本博文氏らによる初期・古式須恵器が着目され始める時期である。橋本氏は甲府盆地の初期須恵器を集成し、その位置づけをおこなったという点で非常に意義深い⁽¹⁾。

2期は1980年代の中央自動車道建設に伴う発掘調査を中心とした時期で、この時期に初期・古式須恵器のみならず当該時期の資料が一気に増加したことにより、古墳時代中期の土器様相はかなり明瞭なものとなった。これらの成果を受けて、末木健・坂本美夫両氏により古墳時代土器編年案が提出された⁽²⁾。また坂本美夫氏はこの段階の須恵器について整理をおこなうことで、この時期の社会様相を概観している⁽³⁾。

3期は1990年代から現時点までである。1980年代後半から始まった曾根丘陵公園の円形低墳墓群の発掘調査により、墳墓の周溝部から出土する、祭祀にかかわる須恵器の

類例が増加した⁽⁴⁾。また甲府市（旧東八代郡中道町）右左口町の朝日古墳周溝部などでも須恵器の出土が見られ、墳墓に関わる須恵器の類例を増加させた。さらに近年では南アルプス市の寺部村附第6遺跡でも同様の墳墓から古式須恵器の出土が認められ、盆地内での造墓活動と祭祀の様相が明らかになりつつある⁽⁵⁾。筆者はかつてこうした調査に関わったことを受け、円形の低墳墓から出土する須恵器についてまとめる機会を得た⁽⁶⁾。また墳墓に限らず近年の資料の増加により、初期・古式須恵器を整理し、時間軸の設定を試みた⁽⁷⁾。

一方甲府市（旧東八代郡中道町）下向山町に所在する米倉山B遺跡では、現段階では甲府盆地最古のON231型式に位置づけられる大甕が出土した。ON231型式はTK73型式の範疇であるものの、TK73号窯から出土した須恵器群より若干相の一群を含むため、TK73型式よりやや古い型式と考えられている。筆者はこの大甕の出土をきっかけに須恵器出現段階の様相について、考察したことがある⁽⁸⁾。しかし現段階ではこの時期の資料は極めて希薄であるため、詳細については今後の資料増加を待たなければならない。

3 伝中央市（旧東八代郡豊富村）出土の須恵器直口壺について

第1図は、伝中央市（旧東八代郡豊富村）出土の須恵器直口壺である。口径は10.8cm、底径は4.4cm、器高は20.3cmを測る。口縁部はロクロ整形で横ナデ、口唇部はシャープである。頸部は2段に区画され、2本で一対となつた凸線が上下2単位、凸線の下方は波状文が配される。凸線は口唇部と同様非常にシャープである。胴部は丸みを帯びており、ロクロにより横ナデで調整される。底部は若干丸みを帯びており、やや安定性に欠ける。底部内面は凹凸がみられる。

本直口壺は、現在のところ甲府盆地では他に類例が認められないが、陶邑窯跡群ではTK73型式からTK216型式で特徴が類似する直口壺が見られる。本直口壺の特徴を見ても、器形はもとより口唇部や凸線がシャープであること、波状文の形骸化が進んでいないことなどを考慮して、当該

時期に位置づけることができるものと推測する。

1991年に行われた米倉山B遺跡の発掘調査において、TK73型式よりやや古相に位置づけられる須恵器大甕が出土したことは、すでに研究史で触れた。しかしこの大甕とTK216型式に位置づけられる東山B遺跡第2号墳から出土した樽型腹を中心とした須恵器群との間は、資料が少なく、長く空白であった。本直口壺は出土状況等、詳細に不明点が多いという問題はあるが、形態・技法の変遷等を考える上では、この空白を埋める貴重な事例であるといえる。

しかし依然として初期須恵器がどのように利用されるのか、また共伴する土器についても不明瞭であるなど、なお多くの課題が残る。今後の資料の増加を待ちたい。

4 おわりに

以上雑駁ではあるが、本直口壺の時間的位置づけを中心特徴を概観した。米倉山B遺跡出土の大甕に加え、出土地点は不明であるもののこれに後続する須恵器の類例が少しずつ増加することで、朝鮮半島から須恵器が伝来してからそれほど時間を経ずして隣接地域と同様に、甲府盆地にも須恵器がもたらされる状況が理解されてきた。今後さらに資料が増加することで、須恵器を含めた土器様相のみならず、カマドの初現や初期横穴式石室導入の問題等、甲府盆地の古墳時代中期の社会様相が明らかになっていくことを期待する。

(2007.1.21 脱稿)

参考文献

- (1) 橋本博文 1979 「甲斐出土のI～II期前半の須恵器」『丘陵』第7号 甲斐丘陵考古学会
- (2) 末木健・坂本美夫 1984 「IX山梨県」『古墳時代土器の研究』 古墳時代土器研究会

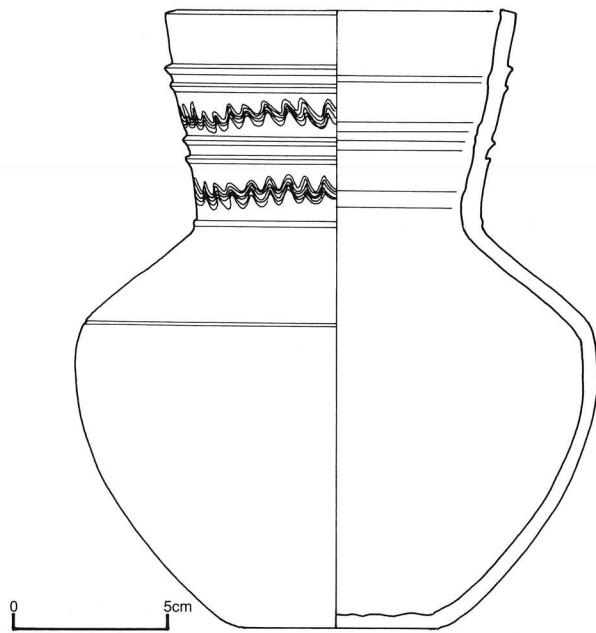


図1 須恵器直口壺実測図

- (3) 坂本美夫 1987 「山梨県」『東国における古式須恵器をめぐる諸問題』 北武藏古代文化研究会ほか
坂本美夫 1990 「山梨の須恵器出現期の様相」『考古学ジャーナル』316号 ニュー・サイエンス社
- (4) 山梨県埋蔵文化財センター 1991 『東山南(B)遺跡』 山梨県教育委員会
山梨県埋蔵文化財センター 1993 『東山南(A)遺跡』 山梨県教育委員会
山梨県埋蔵文化財センター 2000 『岩清水遺跡』 山梨県教育委員会
- (5) 南アルプス市教育委員会 2004 『寺部村附第6遺跡—新山梨環状道路建設の伴う埋蔵文化財発掘調査—』 南アルプス市教育委員会他
- (6) 石神孝子 1998 「甲斐における古墳時代中期の墓制について—曾根丘陵の円形低墳墓—」『研究紀要』14 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- (7) 石神孝子 1999 「甲斐における初期須恵器の展開」『山梨考古学論集』IV 山梨県考古学協会20周年記念論文集
石神孝子他 1999 「甲斐における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究』5号 東国土器研究会
- (8) 石神孝子 1999 「第2節 10号土坑出土の須恵器甕について」『米倉山B遺跡』 山梨県教育委員会他



写真1 直口壺頸部

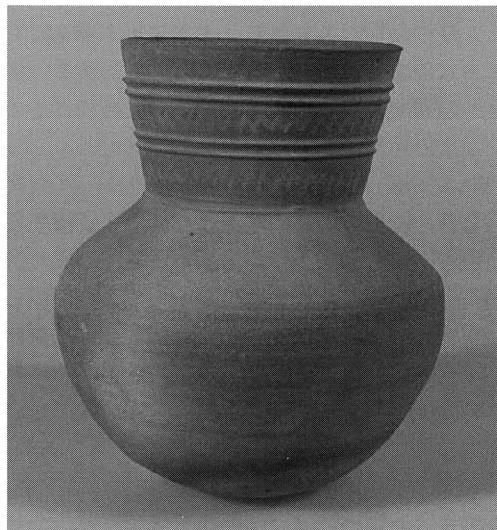


写真2 直口壺